

教員養成課程における初年次教育 (1) — 自校教育を中心に —

Education of the freshman in the training course of teachers (1)
— About the university education —

玉置 さよ子

Sayoko TAMAKI

(福岡教育大学社会科教育講座)

黒田 圭介

Keisuke KURODA

(西南学院大学非常勤講師)

(平成25年9月30日受理)

要 約

大学のユニバーサル化を背景に、いわゆる自校教育に取り組む大学は増加している。実施方法としては、初年次教育科目の一部に組み込まれる場合が多い。自校教育で最も多く取り込まれるのは自校理解教育であるが、教員養成課程・教員養成大学の場合、大学で学ぶ目的やキャリア形成について一見自明に思われる点で、ゼロからのアイデンティティ形成を課題とする一般大学とは、多少条件が異なる。本稿では、教員養成課程に入学した学生に必要な初年次教育と、その一環としての自校教育について、テキストの作成および試行実施を通して検討する。

キーワード：教員養成, 初年次教育, 自校教育

はじめに

福岡教育大学は昨2012(平成24)年度、文部科学省特別経費事業として「確かな教育実践力を養成する『福教大ブランド』の構築」を実施した。その一環として「教員への志を高める初年次教育」に関する検討を行った。本稿では、その概要、および、従来福岡教育大学では取り組まれていなかった「自校教育」に関する検討を整理し、合わせて2013(平成25)年度に取り組んだ試行実施にもとづいて、今後の課題を検討する。

I. 初年次教育とキャリア教育

1. 初年次教育に関する概観

周知の通り大学の初年次教育は、少子化を初めとする社会状況の変化や、それに伴う大学入学者の質の変化を大きな背景として、1990年代半ば以降、各大学で実施されるようになった。当初は課題面で隣接するリメディアル教育やキャリア教育等の概念との間に揺れがあったが、現在ではリメディアル教育は初年次教育から除外されるなど一定の概念整理も進みつつ、2008年の中教審学士課程答申において「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」として、80%をこえる大学で実施されるようになってきている¹。一方、その内容については、

初年次教育の基本プログラムが整理される一方で、対象者である新入生が大学ごとに多様であることを受け、大幅な多様化も見られる。

2. 教員養成課程の初年次教育

多様な展開を見せる初年次教育の中で、近年の大きな課題としてキャリア教育との連携が挙げられる。大学に対して、職業人の養成教育の充実がより一層求められる今日において、初年次教育によるキャリア形成への導入は、さらに必要性を増すと考えられる²。

この中で、大学における初年次キャリア形成教育の課題は、一般大学と、教員養成課程では、多少異なる部分があるとみられる。すなわち教員養成課程においては、大学で学ぶ目的が、まず学校教員免許の取得であること、大学卒業後の進路の選択肢に学校教員が含まれることは、入学時から自明と捉えられやすい点である。このことは、新入生のキャリア意識が高いとも評価できるが、他方で、その自明さに安住すると、入学時のキャリア意識が大学四年間にかえって減退する落とし穴が、大学教育側にも学生側にも存在しうる³。

「職業人の養成」を機能とする大学においては、初年次教育とキャリア教育の連携は急務となっている。そのことは、新入生の学習意欲⁴・キャリア意識が他分野に比べて相対的に高いとみなせる教員養成課程においても同様であろう。

その方策としては、大学生活・大学教育全般を総合

的に取り扱う初年次教育に加え、教員のキャリア形成を見据えた初年次教育が、教員養成課程でも実施されることが考えられる⁵⁾。

3. 福岡教育大学の初年次教育

福岡教育大学では、現在、教員養成課程の一年次必修科目として「日本国憲法」「情報機器の操作」「特別支援教育と介護入門」、必修に準ずる科目として「体験実習」を設定している。かつてはその他に「教師入門」も一年次必須であったが、現在は行われていない。また、一年生対象の「キャリアデザイン」も開設され、初年次のキャリア教育を担っているが、これは一般的な職業意識を高め、適職を見出すことが主目的の科目であり、教員養成に焦点を当てたものではない。

教員養成課程の意識的な初年次教育は、1999（平成11）年度より「基礎セミナーA・B」が開設されたが、科目の内容は「大学入門」（大学生活への適応と専門への接続）の枠の中で、比較的自由に授業構成がなされた。その後2006（平成18）年度より、「基礎セミナー」は生涯教育課程にも必修の「フレッシュマンセミナーA」（および選択のB）となり、科目のガイドラインもより明確にされたが、この際、教員養成課程においてはかえって「基礎セミナー」からの継続性により、名称のみ変更された科目として実施される場合も見受けられた。

現在「フレッシュマンセミナーA」においてキャリア教育の要素に取り組む例も見られるが、総合的な大学入門科目としての役割もより重要になる中、この授業内でのキャリア教育の充実には限界もある。

II. 試行としての「一年生塾」

1. 試行に至る経緯

2012（平成24）年度文部科学省特別経費事業プロジェクトにおいて「教員への志を高める初年次教育」の検討が課題の一つとなった。この検討は、最終的には、教員キャリア教育を主眼とした初年次教育科目をカリキュラムへ組み込むことを目指すものであるが、2013（平成25）年度には、まず試行として、新入生から希望者を募り、「一年生塾」の名称で、授業外の活動として実施することとした。

将来的なカリキュラムへの組み込みの形態として、先に挙げた①初年次教育科目の新設のほか、②現行の「フレッシュマンセミナーA」への一部組み込み ③現行の教職課程一年次必修科目への適宜組み込み等、学習の主眼を活かした多様な形態を念頭におきつつの試行である。

2. 「一年生塾」の概要

2013（平成25）年度の「一年生塾」実施においては、学校教員養成課程に入学した新入生の現状と課題、および現行の福岡教育大学の初年次教育科目群で手薄と

思われる部分を拡充すること、を想定してテーマを選定した。

授業時間外の実施であることから、授業期間中にはおおむね月1回、約60分～90分間とし、その他に、大学は夏期休業だが小中学校は授業期間である9月に、一日を使っての学校訪問プログラムを含めた。

- ①自校教育（6～7月、2回）
- ②学校ボランティア（9月、1回）
- ③先輩訪問（9月、1回）
- ④母校実習（9月、希望者のみ1回）
- ⑤視野を世界に広げる（11～12月、2回）
- ⑥大学4年間での成長を展望する（1～2月、2回）

新入生の現状と課題については、以下の点を重視した。

入学時点の調査で「教員志望」を挙げる新入生は80%を超えるが、四年次に教員採用試験に出願する者は80%に満たない。すなわち、学生全体として見れば、大学での学修を経て、教員への志が減退していることになる。

入学当初の志望が変更される要因は多様だが、そのひとつとして、入学時の調査の段階では「教員という職業」について、十分に理解した上での選択とは言えなかった、という面がある。

職業理解の不足に発するキャリア形成のつまづきは、どの職業にも言えることであるが、教職においては、独特の注意点が存在する。すなわち、新入生は、これまで児童生徒として毎日を学校で過ごし、教員の働く現場に長時間・長期間接してきたという感覚を抱いている点である。職業理解の不足があるにもかかわらず不足を自己認識しづらい、改めて学ばなくとも「もうわかっている」感覚を与える、これらは教員という職業のもつ独特な側面である。

この課題をふまえ、試行「一年生塾」においては、「自分が未来の教員である、という視点から学校教育の現場を再認識する」ことを最も大きな柱とした。（上記②③④）

と同時に、現場の体験によって再確認した「教員という職業」に、大学の四年間を通じた学びで到達しようとするモチベーションを高めるため、福岡教育大学生としてのアイデンティティ確立をめざす自校教育（上記①）、広い視野から「日本の学校教員」という職業を見つめなおす機会として、外国の学校教員・学校教育に触れる機会（上記⑤）、さらに、教員養成大学の中での福岡教育大学の特徴を確認し、その中で四年間を過ごす自己を省みて、今後の課題を確認するため、福岡県内の他の教員養成課程の状況に接する機会（上記⑥）を与えることとした。

本稿では、上記①～⑥のうち、福岡教育大学においてまだ授業科目等として体系的には実施されていない①の自校教育を中心に検討する。

Ⅲ. 初年次教育でおこなう自校教育

1. 自校教育に関する概観

周知の通り、「自校教育」と総称される取組⁶が大学で注目されるようになったのは比較的新しい。大きくみて大学設置基準の大綱化(2001年)が導入を可能とする枠組みを提供し、いわゆる「大学のユニバーサル化」(少子化・大学全入時代の到来による「偶然学生」⁷「不本意入学学生」⁸の増加など)を背景として、学生に、「今この大学で学んでいる自分自身」を、ポジティブに捉えさせ、自己形成に資する必要性が増加してきたとまとめられるだろう。

大川による2008年の調査⁹によれば、自校教育を実施している大学は、調査対象の752大学中136大学で、回答373大学の36.5%、国立大学においては回答62大学中の33大学で53.2%にのぼる。

同調査による、設置目的別の自校教育実施目的は、①国立大学においては「自校史・沿革の理解」「自学の現況の理解」が多い。法人化以後の各大学が自らの独自性を積極的に打ち出そうとしていることの反映と分析されている。②公立大学においては「自学と地域社会の関係」が多く、③私立大学では「自学の理念・使命・目的の周知」が多い¹⁰。法人化後の国立大学においては、入学者がその大学を選択する理由が「国立であること」と「入学難易度が自分に相応」に留まることなく、積極的に「この大学で学びたい」と考え、「この大学で学ぶ自分」に誇りを持つことを重視していることがうかがえる。

なお、この調査では、自校教育を14の類型に分け、各大学の実施状況を分類しているが、このうち多いものは「自校理解教育」(約30%)、「初年次教育」(約20%)、「専門領域導入教育」「大学史教育」「地域理解教育」(約10%)となっている¹¹。

2. 教員養成課程における自校教育

教員養成系の単科大学は、一般に、総合大学に比較して、自校教育の差し迫った必要は感じられにくいとみなせる。大学名がすでに大学教育の目的の一端を明示しており、また、卒業後の進路についても、その準備としての大学でのキャリア形成においても、「学校教員」が主たるターゲットとなることはほぼ自明であるからである。

したがって、教員養成課程における自校教育は、前項に挙げた類型の「専門領域導入教育」¹²としての側面が不可欠となる。すなわち、学生に、「学校教員を養成する大学で学ぶ自身」への認識を深めさせ、教職の専門性への理解を促す自校教育が必要とされるだろう。

3. 福岡教育大学での自校教育

福岡教育大学では、現在まで、授業科目としての自校教育は実施されていない。自校教育を展開する前

提となる自校資料については、大学史が二度編纂されている(『城山の麓に——赤間統合十周年記念誌』(1976)、『福岡教育大学四十年の歩み——福岡教育大学創立40周年記念誌』(1989))が、20年以上前のものである¹³。

大学史が、大学での自校教育の大きな柱であることは疑いなく¹⁴、また「伝統」は、たしかに、自身の未来を築くために現在大学で学んでいる学生にとっての支えとなる要素である。

しかし他方、具体的実践を念頭に置いた場合、大学史を素材にした授業は、おそらく講義科目に最もなじみやすく¹⁵、しかしながら、自大学史を魅力的に、かつ正確な事実関係にもとづいて講義する授業を担当できる教員は限られるだろう。また、編纂された2点の大学史は、それぞれ、テキストとして学習させる目的には供しづらいなどの課題もある。

これらのことから、福岡教育大学としてまず着手しうる自校教育は、初年次教育の必修科目「フレッシュマンセミナーA」の授業の一部として新入生に「自分の大学」を認識させつつ、別途、その認識を在学中のさまざまな機会に思い返す手だてを整えることであろうと考える。

以上の検討の上に、以下、初年次教育の必修科目の一部を構成する自校教育を可能にするためのテキスト作成)、および、「一年生塾」での実践的運用の試みを整理する。

Ⅳ. 自校教育テキストの作成

テキストは、初年次教育の必修科目で2校時を利用すると想定して作成した。内容としては、以下のものを含めた。

1. 第1校時相当分(8ページ)

(1) 地理的位置・キャンパスマップ・地域の歴史(2ページ)

福岡教育大学のある宗像市は、福岡市と北九州市のほぼ中間地点にあるベッドタウンであると同時に、歴史的には、世界遺産暫定リストに登録された沖ノ島を市域に含み、古代から重要視された地域である。しかしながら新入生にとって、これらの認識は高くない。

また、最寄り駅(教育大前駅)付近には江戸時代に参勤交代の街道であった「唐津街道赤間宿」があり、現在は旧国道3号線(県道69号線)で行き止まる街道筋が、かつてはキャンパス内に続き、学生は登校時に同じ道を歩いている。にもかかわらず、そのことが意識されることはない^(a)。

さらに近代には、出光興産創業者の出光佐三氏が近隣の出身であるばかりでなく、氏による土地寄贈によって現在の福岡教育大学のキャンパスが成立したこと、氏の寄贈の意図は「教育こそが日本を支え未来を築く」との期待にもとづいたものであり、現在のキャ

ンパスで学ぶことがそのまま「教職」への人々の期待に応えるものでもあるといえるが、そのような自覚・関心もほとんど持たれていない。

キャンパスと教職を結びつけうる、得がたい素材に満ちていながら、学生にとっては、「自然が豊か」「坂が多い」「田舎」といった、ごく表面的なイメージに留まりがちな場である大学キャンパスを多面的に学ぶため、地理的・地域的理解を促す内容を冒頭に置いた。

また付随して、学生が教育実習を行う三箇所の附属小中学校（福岡・小倉・久留米）の位置を確認することによって、教育実習への意識付けにつなげるとともに、大学史の中で重要な節目である「赤間キャンパス統合」の意義を理解させる。

(2) 大学の目的・理念 (2 ページ)

学則、および大学ホームページに掲載された、大学と学校教育三課程の教育目標を掲載し、まず大学の教育理念を理解させる手だてとした。とはいえ、これらの文言は公的文書の言い回しであり（たとえば学則の「教育目的」は、「学校教育法」の文言をほぼそのまま使用したものである）、新入生が感覚的に理解し、福岡教育大学がどのような大学であるかを自ら語る手がかりとしては機能しにくい。

そこでテキストでは、正式な理念・目標を学んだのち、自ら「福岡教育大学のモットー」を考えてみる活動を加えた。

(3) 大学のシンボル (校章・マスコット) (2 ページ)

福岡教育大学は、従来、シンボルとなるものの由来や紹介が十分とは言えなかった。たとえば校章についても、法人化初年度に広報誌に掲載されるまでは、成立事情も口伝えのみであった。大学歌についても、「応援歌」として2曲が『学生生活』に並列的に掲載されているものの、2曲のうち1曲が運動系の競技会などを想定したものであるのに対して、もう一曲は「師道あらた」とのタイトルで、「教員養成」そのものをテーマにしていることもほとんど意識されていない。

テキストには、校章のデザインと由来、マスコット「フッキー」のデザイン意図と由来（公募による学生のデザインであること）、および「師道あらた」の歌詞を再掲した。

(4) 在学生・卒業生の活躍 (2 ページ)

学校教員という職業は、いわゆる「有名人」となることと、どちらかといえば相容れない。そのため、かたがたに興味を持った学生がウェブで「福岡教育大学出身の有名人」などを調べても、教職関係者はほとんど拾われず、スポーツ選手・芸術家・芸能人などが並ぶこととなる。

むしろ、それらの卒業生の活躍を知ること自校理解の第一歩ではあるが、教員養成課程の自校教育とし

て「教員となった卒業生を一人も見いだせない」状態は十分とはいえない。

テキストでは、県教育界で活躍する卒業生を取り上げるとともに、福岡県内の小学校で働く現任教員の数（約5000名）を挙げ、福岡教育大学の卒業生が、日々、学校現場を支えていることを伝えた。

在学生の活躍については、学生表彰を利用し、多くの分野で力を発揮する先輩がいることを伝え、大学生活で自らの個性を磨き、鍛える動機付けとした。

2. 第2校時相当分 (8 ページ)

(5) 福岡教育大学の歩み (8 ページ)

大学史に相当する部分である。上記の通り、福岡教育大学が編纂した大学史は「統合10周年」「創立40周年」と、節目がさまざま、大学の歩みを大づかみに捉える際にはわかりづらい。そこで、平田宗史名誉教授による統合40周年記念出版『師魂の継承』を参考とし、明治6年の「学科取調所」翌7年の「教育伝習所」、明治9年の「福岡師範学校」に始まる、福岡教育大学の前身にさかのぼり、約140年間を概観することにした。

前半では、現在の福岡教育大学に直結する、戦後の新制大学以降を取り扱い、福岡学芸大学の設置、福岡教育大学へ名称変更と、赤間キャンパスへの統合をへて、21世紀の国立大学法人化までをカバーした。そのさい、第1校時でも取り扱った赤間キャンパス統合と出光佐三の関わりなどを振り返るとともに、大学の変遷がおおむね国の法律制定と連動して進んできたことを簡略に図示し、教員養成大学の学生としての教養の一つとしての、日本の教育制度全体の変遷にも目を向けるようにした。

後半では、時代をさかのぼって、明治初期からの師範学校時代を取り扱い、明治以後の日本史の全体と、その中で日本の学校教育の位置づけ、学校教員養成機関としての師範学校のあり方などの大きな背景をおさえながら、福岡第一師範（現在の附属福岡校の場所にあった）福岡第二師範（現在の附属小倉校の場所）をはじめとする、福岡県の教員養成の歩みを紹介した。

その際、時代をさかのぼるほどに、学生の実感や共感が得にくいことを考慮し、具体的なエピソードを交えたり、現代の目からみたコメントを加えるなどの工夫をおこなった。これらによって、前半と同様、教員養成大学の学生としての教養を高めるとともに、福岡教育大学の「伝統」を、新入生が感じ取れるようにした。

3. テキスト作成上の留意点

第1校時のテキスト内容は、学生にとって身近なものや、自主的に調査しやすいものを取り上げ、一部をクイズ的に投げかけることによって、第1校時と第2校時の間に授業時間外学習が可能なよう留意した。

第2校時は歴史の勉強となるので、学生が集中を切

らさないよう、テキストの随所にキーワードの穴埋め形式や、クイズ形式など、注意を引きつける工夫を施した。

また、現在の初年次教育必修科目「フレッシュマンセミナー A」は各講座の教員が担当する形式であるため、教員の専門によって得手不得手がありうることを想定し、特に第2校時(大学史)のテキストは、原則として読み物として、教員と学生と一緒に読み進むことで両者ともに福岡教育大学史に触れることができるようにした。

V. 「一年生塾」における自校教育の試行実践

1. 試行実践の概要

テキストは、正規授業での利用を想定して作成したが、試行にあたる「一年生塾」は正課外の自由参加であり、必ずしも連続した出席が見込めない。また1校時90分の枠組みも確保しづらく(およそ60分間程度を想定)、時間外学習も完全な自発性にのみゆだねることになるため、目標・内容を一部調整して実施することとした。

(1) 第1回「学長と語ろう」

Ⅲ-1で紹介した大川の自校教育調査は、自校教育担当者として、大学の専任教員について学長が多いことに注目している¹⁶。学長は、大学を代表する個人であるが、通常、学生が大学4年間で学長と接する機会はきわめて少なくなっている。

「一年生塾」では、入塾式と第1回の自校教育を兼ねることで、学長から福岡教育大学の伝統や現況について聞くとともに、新入生が直接学長に自己紹介し、学長と言葉を交わすことによって、大学と自身とを「つながり」として捉える心性を高めることを目指した。

(2) 第2回「福岡教育大学を説明できる人になろう」

連続した出席が必ずしも前提できない条件から、第1回と第2回は、それぞれ独立した内容として構成した。テキストについては、2校時向けに作成した上記「自校教育テキスト」を約60分間の実践向けに簡略化するとともに、学生が主体的に関われる要素を増やした。

2. 第2回自校教育の実際

(1) 課題の提示 (1ページ)

第2回の主眼は、「福岡教育大学を説明できる人になろう」とした。これは、学校訪問や他国の教員・他大学など外部と接する機会を多く設けた「一年生塾」の性格上、参加者が「福岡教育大学」を代表する立場で他者と接する可能性があることを想定し、その際、比較的正確・客観的に、かつ簡潔に、自らの属する大学を説明できる力を養っておくことが必要と考えたからである。

そこで、開始時にあらかじめ、学習後の課題として、約1分間のスピーチを想定し、200字から400字で、「自分の言葉と理解で福岡教育大学を説明する」ことを示した。また、スピーチの手がかりとして、NHKで放送されている「白熱教室」シリーズ冒頭の「大学紹介」部分を数校紹介し、「自分の大学を紹介する」際に語るべき情報の例を整理させた上で、それらの情報を順次学ぶ、という形式をとった。

(2) 地域アイデンティティ (2ページ)

「一年生塾」のプログラムに含まれる学校訪問において、近隣の小中学校を訪れる機会があるが、学校はそれぞれその地域の中心として、また近年はコミュニティ・スクールなど地域に開かれた教育施設としての側面を持っている。近隣の小中学校を訪れた際、背景となる地域を共有する福岡教育大学についてあらかじめ学んでおくことによって、小中学校で目にするであろう地域に関する学習や情報に、興味・関心や意識を向ける手がかりになると考えた。

特に、前年度末にテキストを作成した際にはまだクローズアップされていなかったが、その後、「本屋大賞」の受賞などにより短期間でよく知られるようになった『海賊と呼ばれる男』(百田尚樹著、主人公のモデルは出光佐三)を受け、赤間宿・出光佐三・福岡教育大学キャンパス、の部分に焦点を当てた。

(3) 福教大の「モットー」を考えてみよう (2ページ)

「自校教育テキスト」の内容を用いて、学則等から福岡教育大学の教育目的を一覧した上で、スタンフォード大学のモットー「自由の風が吹く」を紹介し、より簡潔明瞭で魅力的な表現による「福岡教育大学のモットー」の自作に取り組んだ。また、各自が考案した「モットー」から出席者全員で良いものを選ぶ活動を加えた。

(4) 福教大のシンボルと由来を知ろう (1ページ)

「自校教育テキスト」の内容を用いて、校章およびマスコット「フッキー」のデザインと成立事情を確認し、両者とともに織り込まれている要素(城山とどんぐり)を見出させた。また、出席者に音楽を専攻する新入生が多かったことから、応援歌「師道あらた」は歌詞のほかに楽譜を配布し、初見で歌ってもらうことを試みた。

(5) 卒業生・在校生の活躍 (1ページ)

「自校教育テキスト」に沿って、名誉学士であり特命教授である武田鉄矢氏ら、各界で活躍する卒業生を手短かに紹介するとともに、卒業生が県内・県外の小中学校現場で義務教育を支えていることを強調した。

(6) 福教大のあゆみ (1 ページ)

「自校教育テキスト」では重要な部分であるが、大学史の学習は、座学での集中力や事前事後の学習が伴って初めて、教員養成課程の学生の教養として身につくものである。今回は、その効果を期待できる条件がなかったことから、テキストに付録としてつけた変遷表のみを用いて、「教員養成の百数十年にわたる伝統」を確認するに留めた。

VI. 成果と課題

教員養成課程での初年次教育に資する自校教育を検討し、テキストを作成し、試行として「一年生塾」を実践する中で得られた成果と、試行実施に見られた困難点を整理する。

1. 成果

初年次教育必修科目の2校時使用を想定した「自校教育テキスト」を作成できたことが、第一の成果である。従来、福岡教育大学の自己理解については、自明であるとみなされ再確認も省略されてきた事項、あるいは当時の現場にいた教職員からの口伝えのみで伝えられた事項が多く、教職員においてさえ、知らない事柄、説明できない事柄が少なくなかった。今回、テキスト作成の過程で聞き取り等を実施し、キャンパスを単なる「器」としてではなく、「所属の場」として意識できる手だてとしてのテキスト作成を試みた。

内容的には不十分な部分も多く残るが、改良を重ねることで、より効果的な自校教育につなげたい。

2. 課題

しかしながら、試行の実践においては、多くの課題が残った。自校教育ののち、近隣の赤間小学校へのボランティアを実施したが、赤間小学校は地域学習の手だてとしての展示も充実しており、展示の中では福岡教育大学についても触れられていた。しかしながら、教頭から展示の説明を受けた学生の反応は、生返事の相槌に留まった。「一年生塾」試行の目標(学校現場で地域理解の重要性を認識する)は、達成されなかったと評価せねばならない。

原因は大きく2点を挙げることができる。第1点は、「一年生塾」が毎回出席を求めないものとして参加者を募集したため、学校ボランティア参加学生と自校教育の出席学生があまり一致しなかったことである。

もう一点は、自校教育を実施した段階では、まだ出席者同士が初対面に等しかったこともあり、学生が自ら動き活動する時間を多めに取り、また、見知らぬ人の中で自発性を出しやすくするため、比較的リラックスして取り組めるよう、当日の運営を行ったことである。これらの工夫自体は誤りではないが、結果として、座学での集中力が低まり、学習内容を身につけようという姿勢を後退させてしまったと思われる。

そもそも自校教育の内容は、社会常識でもなく専門知識でもない。学生の立場からは「知らなくとも困らない」事柄に分類される。自校教育で学んだ事柄が知識として定着することは、大きくみて、あまり望めない¹⁷。

したがって、自校教育をより効果的に実施するには、複数の方向からの手だてが必要になると思われる。

まず、最低限の知識については、正課またはそれに準ずる授業の機会に、「学習」が保証された環境で行うのがよいと思われる。初年次教育科目「フレッシュマンセミナー」への組み込みは、学生同士が日常的に接するグループであることや、今後四年間の指導を受ける教員とともに学べること、また比較的少人数で実施できることなど利点が多いと思われる。

次に、意識の定着については、折に触れ多様な形で学生に「思い返す」機会を提供できるとよいだろう。「大学のあゆみ」をまとめたコーナーが学術情報センターにあり、意識しなくとも通りすぎるたびに見慣れた事物が少しずつ増えていく(小学校の廊下展示と同様の効果)などである。マスコット「フッキー」については、多くの場やグッズで使用されていることから、定着度は高い。

さらに、「知らなくとも困らない」状況に対しては、一定のインセンティブを与えることも手だてとなる。「香川大学検定」¹⁸などの取り組みが参考となるだろう。

まとめにかえて

福岡教育大学において、教員養成課程の初年次教育には、教職に関するキャリア教育的要素を強化してゆく必要性が、従来にも増して高まっていると思われる。

その中で、教員養成課程ならではの自校教育のありかたについては、何を目標とするのか、知識の定着をどの程度目指すのかを含め、実践と両輪をなす検討が、さらに必要である。作成した「自校教育テキスト」のさらなる実用化(内容的にも、利用機会も)に努めたい。

本稿は自校教育を中心に扱ったが、「一年生塾」は通年の事業として教員養成課程の初年次教育の試行実施を継続している。この実践をふまえた検討は、次稿を期したい。

¹ 山田礼子、「大学の機能分化と初年次教育——新入生像をてがかりに」、『日本労働研究雑誌』、第629号、2012年12月、p.312によれば、2010年初時点全国の82%の大学が初年次教育を実施している。

² 同上、p.34、p.42。

³ 同上、p.42によれば、私立大学の新生は卒業後のキャリア意識が国公立大学よりも高く、私立大学の初年次教育にキャリア教育の要素が組み込まれていることが示唆される。

- ⁴ 同上, p.39によれば, 教員養成・教育分野の新入生は, 他の分野に比べて積極的な学習行動との親和性が高い。
- ⁵ 同上, p.42でも, 初年次教育でのキャリア教育が「単一の機能を重視する初年次教育」の形で進められる可能性は高いとしている。
- ⁶ 大川一毅, 「大学における自校教育の現況とその意義—全国国立大学実施状況調査をふまえて—」, 『秋田大学教養基礎教育研究年報』, 第8号, 2006年, p.11.によれば, 「大学の理念, 目的, 制度, 沿革, 人物, 教育・研究等の現況, 社会的使命など, 自校(自学)に関わる特性や現状, 課題等を中心的な教育題材として実施する一連の教育・学習活動」とまとめられている。
- ⁷ 寺崎昌男, 「自校教育の役割と大学の歴史—アーカイブスの使命にふれながら—」, 『金沢大学資料館紀要』, 第5号, 2010年, p.4によれば, 少子化と入試の多様化によって, 大学によっては「学生たちは, 本当に偶然に今いる大学へ来ている」状況が生まれている。
- ⁸ 同上, p.4には, 大学の入学難易度を問わず, たとえば「もうちょっとできたら理科Ⅰ類に行けた, と思って」いる東京大学理科Ⅱ類の学生の心境が紹介され, 「日本の大学は不本意入学, 不本意学生だらけ」と語られる。
- ⁹ 大川一毅, 『大学における自校教育の導入実施と大学評価への活用に関する研究』, 平成20～22年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書, p.8.
- ¹⁰ 同上, pp.19-21.
- ¹¹ 同上, pp.10-14.
- ¹² 同上, p.10で「専門領域導入教育」は「自校や自学部の目的, 教育・研究機能の特性を理解させる授業内容を組み込み, 専門教育(学習)の導入及び動機付けを担う。」と説明されている。p.13では単科大学である帯広畜産大学の例を挙げ, 学生の授業評価コメントとして「これこそまさに畜産大!(略)」との声を紹介している。
- ¹³ 他に, 名誉教授で教員養成研究者である平田宗史氏によって, 赤間統合40周年に合わせて出版された『「師魂」の継承——福岡教育大学の過去・現在・将来』(梓出版, 2006年)がある。
- ¹⁴ 寺崎, 前掲, p.5.
- ¹⁵ 同上, p.5.
- ¹⁶ 大川, 前掲, p.16.
- ¹⁷ 寺崎, 前掲, p.5では, 立教大学において入学式で一度は聞いていたにもかかわらず, 学生たちは大学の創設が明治7年だったことも, 5～7名で始まったことも, 全部忘れてしまっていた, と紹介されている。
- ¹⁸ 葛城浩一, 山本珠美他, 「『香川大学検定』を用いた自校教育の授業モデルの開発」, 『香川大学教育研究』, 第9号, 2012年。大学教育開発センターの葛城氏を中心に, 2008年度から取り組みが始められ(「香川大学検定をつくる! —自校教育へのアプローチ—」『香川大学教育研究』, 第6号, 2008年),

検定の実施(「新入生は大学をどの程度理解しているか—『香川大学検定』の解答状況から—」, 『香川大学教育研究』, 第7号, 2009年), 内容分析(「『大学検定』の自校教育への利用可能性—「大学検定」の内容分析を通じて—」, 『香川大学教育研究』, 第7号, 2010年)と, 継続的に検討・改善されてきたものである。

- (a) 2013(平成25)年11月に, 旧唐津街道と大学キャンパスをつなぐ位置に当たる大学西門前に, 「伊能忠敬が歩いた坂道(測量200年記念)説明板」が設置され, 11月7日に除幕式が行われた。Ⅵの2であげた課題の一つである自校意識の定着にとっても有効な手がかりとなると期待される。